

西南学院大学・社会福祉学科開設20周年 記念事業報告

— 社会福祉学科のこれまでとこれから —

安部計彦・中馬充子・倉田康路・
河谷はるみ・倉光晃子・穴井あけみ¹

A Report on the 20th Anniversary Events of the Division of Social
Welfare in Seinan Gakuin University
— the History and the Future of the Division of Social Welfare —

Kazuhiko Abe, Mitsuko Chuman, Yasumichi Kurata,
Harumi Kawatani, Akiko Kuramitsu, and Akemi Anai

はじめに

1. キリスト教と社会福祉学

そもそも社会福祉はキリスト教と密接な関係がある。社会福祉学（ソーシャルワーク）の源泉はいくつかあるが、その一つは19世紀にイギリスで教会関係者によって行われた慈善活動である。キリスト教の隣人愛に基づき、産業革命の結果生じた少年労働や貧困、疾病等に苦しむ人への自主的な慈善活動である。現在でも西南学院大学のボランティアセンターが宗教部に所属しているのも、このような経緯とも重なる。

しかし個人の善意だけでは解決できない深刻な現実や対応の困難さに対して、科学的で組織的な対応の必要性が求められた。慈善団体が集まったCOS（コミュニティ・オルガニゼーション・ソサエティ）が家庭訪問をはじめ、ア

¹ 西南学院大学社会福祉実習指導室

アメリカでCOSの職員として働いていたメアリー・リッチモンドが1922年に「ソーシャルケースワークとは何か」という本を著し、ケースワークの専門化に努めた。つまり個人の信仰や思いから始まる慈善活動から社会科学としての社会福祉学が生まれたのである。

そのような経緯もあり、西南学院大学に社会福祉を専門に研究・教育する学科が生まれたのは、ある意味必然であった。

2. 社会福祉学科誕生の経緯

ところで社会福祉学科は当時、文学部児童教育学科の先生方の中から「西南学院大学に社会福祉の専門学科が必要」という熱い思いから誕生した。

筆者は社会福祉学科創設5年目からの勤務であるため誕生に関する状況は先輩諸先生からの伝聞であるが、当時の児童教育学科の堺太郎先生の連合教授会での「涙の大演説」により、僅差で学科創設が承認されたと聞いている。

その堺先生は在外研究でナチスドイツの障がい者絶滅計画に抵抗し、町全体が「総合医療福祉施設」とも呼ばれるベートル市に行かれるなど、障がい者福祉にも造詣が深い方であった。また児童相談所で心理職として働き、福岡市の児童相談所長や障害福祉課長を歴任された淵上継雄先生は、児童福祉や障がい児者福祉に対して強い思いをお持ちであった。また臨床心理学の井上哲雄先生は大学生の頃より、当時は全く制度的な支援のなかった自閉症児への自発的な支援活動である「土曜学級」にかかわられておられた。主に児童福祉や障がい児者福祉に造詣の深い3人の先生方が社会福祉学科創設の原動力になられたようである。

さらに連合教授会で社会福祉学科の創立が学内で承認された後、文部科学省の学科新設の承認を得るだけでなく厚生労働省の社会福祉士と精神保健福祉士の養成課程創設の承認を得るためには、実習先の施設の受け入れ内諾を得る必要があった。社会福祉学科の創立以前のため社会福祉学を専門とする教員はいないなか、藤田尚充先生や松永裕二先生が短期間に100カ所以上の施設・機関に実習受け入れのお願いに回ったと伺った。このように多くの方の熱意とご努力によって社会福祉学科が誕生したことを20周年記念に際して、改めて思い

出した。

3. 20 周年記念の理念

今回、社会福祉学科創立 20 周年記念行事として 3 つのことに取り組んだ。①記念シンポジウムの開催、②記念誌の発行、③記念植樹である。それぞれの詳細は担当していただいた先生方によって紹介されるので、詳しくはそちらをご覧ください。

ただシンポジウムのテーマを「社会福祉学科のこれまでとこれから」としたように、共通した思いは、①教員だけでなく在学生・卒業生と一緒に作り上げる、②将来に向けて形あるものとして残すということであった。

そしてシンポジウムに寄せられ You-Tube で共有された卒業生のビデオレターや 20 周年記念誌に収録されている諸先生・卒業生のメッセージから、また記念植樹にご参加いただいた聖書植物園のみなさまや教職員、在校生の顔ぶれを見て、改めて社会福祉学科が多くの人達の支援を受けていたことを自覚した。「人と環境をつなぐ」のが社会福祉（ソーシャルワーク）の機能の一つであるが、社会福祉学科の誕生と成長はまさに、多くの人のつながりと支援によって 20 年を迎えることができたと感謝している。

現在の日本はさまざまな困難に直面しているが、その中で困難や被害を抱える人たちに寄り添い、個人の課題を社会の問題として捉え、個々人の人権と社会正義の実現を目指すソーシャルワーカーを養成する教育・研究機関として、社会福祉学科に課せられた使命は大きいと考える。

クロスプラザ入り口にある 10 周年記念樹とチャペルの裏にある 20 周年記念樹の成長を祈念し、西南学院大学社会福祉学科の今後の活躍をみなさまから応援いただけるよう教員一同で精進する所存である。（安部計彦）

I. 社会福祉学科 20 周年記念シンポジウムの開催

2021 年 10 月 30 日（土）13：30～16：00、社会福祉学科設立 20 周年記念

シンポジウム「社会福祉学科の『これまで』と『これから』」を開催した。このシンポジウムは、社会福祉学科設立 20 年を迎え、学科の歴史と懐かしい思い出を振り返りつつ、今後の学科に期待することや展望を語り合う場として、会場（西南学院大学チャペル）と YouTube 配信に分けて開催した。YouTube 配信は、同年 11 月 23 日（火・祝）まで公開し 1556 回、視聴された。

シンポジウムは、山田美保准教授（社会福祉学科）の司会で開会した。田代裕一教授（人間科学部長）の挨拶後、安部計彦教授（社会福祉学科）によるコーディネートのもと、野口幸弘氏（元社会福祉学科教授、社会福祉法人福岡障害者支援センター理事長）、住田啓二氏（社会福祉学科 2007 年 3 月卒業・福岡市社会福祉事業団・西南社福の輪会長）、木下美紘氏（社会福祉学科 4 年生）、倉田康路教授（社会福祉学科主任）の 4 名が、社会福祉学科の「これまで」と「これから」というテーマに基づき報告された。

1. 社会福祉学科の「これまで」と「これから」(前半)

野口幸弘氏は、「西南学院大学人間科学部社会福祉学科のこれまで」とする内容で 2001 年 4 月、主に社会福祉士・精神保健福祉士の養成校として、学科が創立されたこと、当時 7 名の教員と入学生 188 名でスタートしたこと、翌年 4 月から新規教員が加わり、16 名の教員で本格的にスタートしたこと、また同年 5 月 11 日、福祉交流会が学科 1 周年記念公演事業として開催されたことを話された。

住田啓二氏は、自己紹介・西南社福の輪・在学時の思い出・卒業生の立場から西南社会福祉学科に期待すること、という 4 つのテーマで話された。住田氏は 07 期生であり、4 年次ゼミは、精神分野を学ぶため、館暁夫先生のゼミで学ばれた。卒業後は社会福祉法人社会福祉事業団に、社会福祉職として入職し、障害者生活・就労支援施設、福岡市障がい者基幹相談支援センター、現在は同法人の本部事務局で、職員の採用や異動などの人事全般、職員の人材育成などの研修等を担当されている。

住田氏は現在、西南社福の輪（社会福祉学科同窓会）の運営委員でもある。そこで、「現在運営委員で 1～2 ヶ月に 1 回程度集まり、活動内容を協議して

いる。直近では、7月12日にソーシャルワーク実習指導Ⅰの授業で運営委員から実習の意義などについて、自分たちの体験を交えて、2年生に話をした。西南社福の輪を構成するのは、西南の卒業生、在學生、教職員である。」と話された。

また在学時の思い出について、特に2年次の夏休みに自分の視野を広げたいと考えて、3週間ほど、カンボジアに一人旅に行かれたことを当時の写真とともに説明された。3年次は社会福祉士実習、4年次は精神保健福祉士実習を紹介し、障害児のレスパイトボランティアが仕事・アルバイトに繋がったと話された。住田氏は、「今でも野口先生をはじめ、西南学院大学の先生方にはお世話になることが多く、大学と繋がりを続けていくことを非常に有難く思っている。」と感謝の気持ちを述べられた。

最後に社会福祉学科に期待することとして、「特に期待するのはリーダーシップ、ぜひ西南学院大学での学びをもとに、様々な場面でリーダーとなる人材になってもらいたい。」「福祉は福祉の分野に専門家が集まるというだけではなく、社会のあらゆる場所に福祉的な視点を持った人たちが点在をすること、そしてその各ポジションにおいて、弱い人また少数派とされてきた人の立場に寄り添い、その人たちを含めた身近な社会をより良くしていくソーシャルワーカーになっていくことが一番大事である。」と話された。

木下実紘氏は、来年度（2022年度）から西南学院事務局職員に内定した4年生である。社会福祉学科から西南学院の専任職員になるのは、木下氏が初めてである。現役の学生の立場から4年間を振り返り、社会福祉学科に期待することを話された。その具体的な内容は、自己紹介、そして社会福祉学科に入学した理由、1年生～4年生までの学生生活、4年間の学びを振り返って、社会福祉学科のこれから、であった。

はじめに社会福祉学科に入学した理由は、中学・高校と様々なボランティア活動に参加した経験から、人が幸せに暮らしていくための必要な制度や、社会の在り方について福祉を学びたかったためである。また大学時代に、地域ボランティアと海外ボランティアに取り組んだこと、特に海外ボランティアでは、本学のボランティアセンターが募集していたフィリピンの貧困地域での活動に

参加したことを話された。

木下氏は、3年次から、新型コロナウイルスが流行し、講義がオンラインやオンデマンドの授業となり、今までとは異なる学生生活になった。そのような状況のなかでも、社会福祉士実習（母子生活支援施設）で子どもの学習支援や見守り、事例検討、個別支援計画の作成などを行っている。実習を通して、利用者を表面だけで捉えるのではなく、背景も含めて広い視点から捉えることの大切さ、他機関・他職種との連携・協力の大切さを学ばれた。4年次では、ゼミ・就職活動、社会福祉士の勉強を中心に取り組み、倉田ゼミで、「子どもの貧困」について興味を持ち、ゼミ論文を完成した。

就職活動は、第1志望であった学校法人西南学院から内定をいただき、4月から母校で職員として勤務することになっている。最後に「入学当初の私は、社会福祉というのは限られた分野で専門的な内容を学ぶ学問であり、福祉業界の職についてこそ役に立つものだと思っていた。しかし演習や実習、ボランティア活動等様々なことを体験的に学ぶ中でそのイメージが変化した。社会福祉は、専門的な学びはもちろんであるが、人との関わり方や、相手を理解すること・寄り添うこと、連携・協力といったチームワークを大切にすることなど、どのような分野においてもどのような生き方をするにしても、人として必要なことを学べる。」と話された。そして「私自身が4年間を通して、人を大切にし、人に寄り添うという、人生の軸ができた。私は、社会福祉の考え方は、キリスト教の『自分のことのように人を愛しなさい』という隣人愛と共通するものだと感じている。西南学院大学で社会福祉を学ぶということは、キリスト教と重ね合わせて学べることであり、これこそが自分にとって意味あることだったと感じている。」、そして最後に「私自身も地域でたくさんの実習やボランティアをさせていただいた経験から、これから益々地域との連携が求められるのではないかと考えている。住民同士の繋がり希薄化が進む社会において、今後学生が地域に出てイベントを開催したり、地域のボランティア活動に参加したりする機会が増えていくことが大切なのではないかと思う。」とメッセージを送られた。

倉田学科主任は、社会福祉学科の現在の教育、今の状況、そしてこれから、

という順で話された。はじめに、これまで学科を支えてくださった先生方と教職員（これまでの 18 名の先生、24 名の実習指導室・教務課職員、現在の 16 名の学科教員と 4 名の実習指導室・教務課職員）に感謝の気持ちを述べられた。そして 3,000 名を超える社会福祉学科を支えてくださった卒業生、今年 115 名の新生が社会福祉学科・西南社会福祉の輪であると話された。

社会福祉学科の教育の理念と目的は「学則第 1 条、キリスト教主義による人間教育の理念に基づき、社会福祉の専門的な知識と技術というものを習得し、専門家である社会福祉士、精神保健福祉士、保育士などを養成するとともに、この知識と技術を生かして社会に貢献する人間を育成することである。つまり、人間教育+専門教育、さらに専門家の養成とともに、知識と技術を生かして社会に貢献するということが、教育の理念・目的として設定されている。今年入学した学生に資格取得アンケート調査をしたところ、社会福祉士希望は 91.6%、精神保健福祉士希望は 52.1%、保育士希望は約 2 割、そして高校福祉の教員免許を希望しており、全く資格を取らないという希望の学生は 1 人しかいない。このことから、多くの学生が資格を取って就職したいというようなニーズがわかる。また専門教育とともに教養教育による人間教育を行うというのが本学の特徴である。具体的にはキリスト教学、人文科学、社会科学、自然科学等の共通科目のなかで、こういった人間教育を行う科目を配置して、幅広い視野と豊かな人間性を育てるというカリキュラムである。」と話された。

次に社会福祉学を学び、身に付けてもらいたい力について、社会福祉学科で議論した 4 つ（①社会福祉の基盤となる知識と技能、②思考力・判断力・表現力、③実践的な能力、④「社会福祉の価値とはなにか」それを探求する力）と「この 4 つの力を講義でしっかりと理論を学び、その理論を実際に生かしてもらうための練習として演習を行い、更にその演習を踏まえて現場で体験的に身に付けてもらう実習がある。この講義と演習と実習によって理論と実践を身に付けて、4 つの力を獲得する。他の学部・学科以上に、特に演習と実習というものを多く組み入れているのが社会福祉学科の特徴である。」と話された。

そして、社会福祉学科の今の状況として新たな教育課程づくりと体系化づけられた教育課程、学生のニーズに応じた学生本位のカリキュラムの編成を説明

された。4つのモデル（①社会福祉士受験資格取得履修モデル、②社会福祉士・精神保健福祉士受験資格取得履修モデル、③社会福祉士受験資格取得・保育士資格履修モデル、④共生社会履修モデル）を作り、これらの履修モデルに基づきながら、それぞれの学生の希望に応じた進路を目指した学習に取り組むことや実習、国家試験、就職の状況を話された。

これからの社会福学科について、「まず変えなければならないものとしては、新たな時代の社会福祉ということで、限定された社会福祉ではなく、時代とともに対象者・目的・レベルをアップした社会福祉に枠組みを変えていかなければならない。『すべての人が必要とする社会福祉』、『ひとり一人の幸せを実現する社会福祉』そして『あらゆる分野で生かされる社会福祉』、これに応じた社会福祉学科に、これから変えていかなければならない。それから地（知）の拠点づくりとして、地域に開かれた地域と連携した社会福祉学科を目指さなければならぬ。そして大学というのは、高校や小学校・中学校と比べて、研究を進めていくという特徴があるので、研究の知見を全国に発信する社会福祉学科を目指していかなければならない。」「今改めて社会福学科が存在することの意味を問うということからは、なぜキリスト教を理念とする西南学院大学に社会福祉学科があるのか。キリスト教主義の人間教育に基づく社会福祉の教育とはどのような教育なのか、改めて私たちは確認しなければならない。そのことを学科の理念・目的・ミッションに活かしていく。このシンポジウムを機会にしながら変えてはならないものは何なのかを考えてみたい。」と話された。以上、前半のシンポジウムである。

【シンポジウムの様子】



[写真左から、() 内は当時] 倉田康路氏（社会福祉学科主任）、木下実紘氏（社会福祉学科 4 年）、住田啓二氏（社会福祉学科 2007 年 3 月卒業・福岡市社会福祉事業団・西南社福の輪会長）、野口幸弘氏（元社会福祉学科教授・社会福祉法人福岡障害者支援センター理事長）、安部計彦氏（社会福祉学科教授）

2. 社会福祉学科の「これから」(後半)

シンポジウムの後半は、登壇者によるトークディスカッションとして、キリスト教教育を基盤とする本学における社会福祉学科の存在意義や役割、これからの学科に対する展望などが語られた。はじめに安部計彦教授（コーディネーター）から野口氏に、住田氏、木下氏、倉田氏の話聞いた感想を尋ねられた。

野口氏は、「卒業生と在校生、学科主任の話聞かせてもらい、本当に西南学院大学社会福祉学科がきちんとした学科になってくれていることを嬉しく思いました。まず住田さんの話を聞いていると、学生時代からボランティアに取り組みやすい環境を作りたいと思いました。木下さんの話を聞くと、本当に良く勉強されているなと思いました。こういう学生が育っていくと、地域の社会福祉の底上げに繋がるなと確信をします。倉田先生の話では、カリキュラ

ムの法制度や作りなどについて、多分西南学院大学だけの問題ではなくて、国の問題もあると思うのですが、ぜひリーダー的な存在で推進してもらえたらと良いなという感想を持ちました。」と話された。

倉田学科主任は、前半の問い「なぜキリスト教を基本理念とする西南学院大学に社会福祉学科があるのか」、「キリスト教の理念と社会福祉の理念のどこに、共通して通じるものがあるのか」について話された。そして「一般的にキリスト教というのは、いわゆる愛と奉仕の精神ということがよく言われております。特に『愛』のなかでは隣人愛という言葉が使われております。つまり、他者に対して他人ごとではなく自分のことのように愛しなさい、というのが隣人愛ではないかと思います。その隣人愛とは、ただ単に他者を愛するという訳ではなく、その愛する気持ちをもって貢献しなさい、奉仕しなさい、ということが奉仕の精神だと思います。つまり、愛をもって行動する、それは他者、あるいは他者が多く存在する社会に対して奉仕する、これがキリスト教における理念だと私なりに理解しております。一方で、社会福祉の理念とは何だろうか、社会福祉というのが、人に対するものと、社会に対するものと大きく二つにアプローチできると思いますが、人にアプローチする理念としては、やはり尊厳だと思います。人間の尊厳、すべての人間が同じ人間として権利を持ち、そしてすべての人において生きていくことの権利を持っている、これが人間の尊厳である。そして社会に対するアプローチとして設定される理念としては、社会正義、すべての人間は社会において自由であり平等である、この尊厳と社会正義というものは、まさに隣人愛と繋がるものがあるかと思います。また社会福祉というのが、先ほど私が説明させていただいたように、単に社会的な問題とか生活上の問題を現象としてとらえるだけではなくて、更にそこからその問題をどう解決していくか、支援という行為、行動によって成り立つものだと思います。それはキリスト教の理念における奉仕の精神です。行動を起こす。ここに繋がるものが社会福祉の支援だと思います。つまり、社会福祉の理念とキリスト教の理念というものに通ずるものがあって、その中で西南学院大学に社会福祉学科が存在しているのだ、ということ、シンポジウムの問いを設定する中で確認いたしました。」と話された。

次に、安部教授から野口氏に「17年間の大学教員生活のなかで、学生に何を伝えたかったのか、どういうことを学生に伝えたかったのか」と尋ねられた。野口氏は「本当の奉仕というのは、その人のニーズに合わせて支援するということだと思います。あまり福祉に関心がない学生には、本当の意味で人を援助するということはどういうことなのか、きちんと理解できる体験や場を作っていく必要があります。」と話された。

そして安部教授は住田氏に、現場でボランティアを受け入れる側として感じていることを尋ねられた。住田氏は「受け入れ側として、やはり以前よりも色んな制約といいますか、個人情報なども含めて、変な意味で固くなってしまっているというところはあるのではないかと感じています。またさらにコロナの感染症などの配慮をする中で、慣れないところもあるのかなと感じています。ただ、学生さんがボランティアできなくなっているというのが、私はしっかりこなくて、アルバイトに励むということもそれはとても大切なことだと思うのですが、働くようになれば働くので、学生のうちには、学生にしかできないことがあるのではないかと強く感じています。ぜひアルバイトだけではなくて、自分で色々な活動に取り組んでもらえればいいと思います。」と話された。

続けて安部教授は、倉田学科主任に「福祉を学んだ人間が、色々な場所に行くというのもあるけれども、福祉を専門にしている人が色々な人と関わるようになってきた、関係機関が広がったというのはあるかもしれない。倉田先生、福祉の拡がりという面に関して、どうお考えになりますか。」と質問された。倉田学科主任は、「社会福祉は貧困・高齢・児童・障害という、非常に限られた人たちに対して、弱者を救済する、最低限のレベルでの生活保障というような時代が今もずっと続いて、社会福祉は、そういう人たちに対して援助するというようなイメージがまだまだ残っています。社会福祉は、そういう限られた人のためのものではなく、全ての人がある対象となります。全ての人間はライフサイクル、ライフステージのどこかでリスクがあり、リスクのない人間はいないわけです。生まれてから死ぬまでの間に必ずどこかでリスク、危機的な場面が出てきて、その危機的な場面をどうやって乗り越えていくのか、ここに取り組んでいくのが社会福祉だと思います。すべての人が普遍的に持っているひ

とつのニーズとして社会福祉がある、このことをまず、他人事の社会福祉ではなくて、自分事としての社会福祉として理解してもらおうということが、社会福祉に対する理解を深めることになると思います。人と人との関わりがあるところは、すべて社会福祉につながる、そこで社会福祉の学びの中では対人援助、コミュニケーション能力というものを養うこともあります。その能力というのは、人と関わりのあるすべての職場の中で生かされていくところであり、人を理解するということがまず何よりも大切です。そして何がその人にとって大切なのか、何が必要なのか、ニーズを把握する、これも社会福祉の大きな特徴、学びの一つです。このことを考えた時に、すべての分野で、社会福祉が活かされるものだと考えます。卒業生から、在学しているときには社会福祉がどのようなものであるのか、役に立つのかがよく分からなかったけれども、社会人になって、社会福祉を学んだ意味がよく分かる、という感想を聞きます。それは社会福祉の職場だけではなく、一般企業に就職した卒業生からも聞きます。卒業して気付くのではなくて、私たち教員は、在学中にそのことを学生に伝える教育をしなければならぬと思います。」と答えられた。

また安部教授は、倉田学科主任に「コロナの影響を、これから社会福祉学科の教育の中で活かしていくこと」について質問された。倉田学科主任は「コロナが去年から今年にかけて、これだけ発生するということを予測できた人はおそらくいないかと思います。これだけ長引いた状況が未だに続いているという予測しない社会的な問題として、コロナ感染の拡大に伴って、経済的な問題、あるいは就職がなかなかできないような制限などが社会の全体に広がっています。これは社会福祉の問題です。コロナとどう付き合いながら、問題を解決していけばよいのか、どのような方策で解決していなければならないのか、直面する問題を社会福祉学科の学生あるいは我々に投げかけられているような状況です。問題解決に向けて、どのように考えればよいのか、教材としても考えていけるとと思います。また、教育形態も対面授業からオンライン授業に変わりました。オンライン授業の内容や在り方は、工夫次第で移動しなくても授業ができる、そこをどのように有効活用していくのか、こういう部分も考えられると思います。」と答えられた。

最後に、野口氏が「今のコロナの話ですけれども、去年だったと思いますが、障害者の入所施設にコロナが発生して、多分最初に公表されたのが千葉県であったと思いますが、あの時は本当に驚いて、もし自分の法人の施設でコロナが発生したら、と思いました。その時の対策を見ていると、倉田先生も言われたように、今までの単独の福祉とか、医療だけでは解決しないと思いました。コロナをずっと見ていて、予防的な視点がとても大切であると思います。仕事をしていて、障害者の問題というのをわざわざ難しい人にしていて、それを何とか対策しなければいけないみたいなどころがあります。虐待問題は、だいたい親か支援者なんです。それを予防するのではなくて、罰をする法律を作って罰をするという考え方がだいたい当たり前なんです。これでは虐待防止の研修をしてもなくなるはずがないと思います。それよりも虐待をする人たちが、虐待をしないような予防的な視点での人材養成をきちんとする、しかし虐待をしないような人って誰ですか、というイメージはまだない。そういうことを作ることやコロナが発生しないように、利用者に感染しないような環境をどうやって作っていくかみたいなことを徹底的に検証していく必要が、もっと必要だと思います。難しいですけれども、それを現場で作っていきいたいと思います。そのために社会福祉学というものが非常に大事だと思っております。」と総括された。

3. 卒業生による学科設立 20 周年に寄せたメッセージ動画

シンポジウムの最後、卒業生 31 名による社会福祉学科設立 20 周年に寄せられたメッセージ動画が、大学チャペル（会場）のスクリーンに映し出され、懐かしい卒業生一人ひとりの熱いメッセージが会場を包み込んだ。動画のエンディングでは、校歌を聞きながら、西南学院大学の学び舎を眺め、登壇者、会場の参加者、YouTube の閲覧者全員が、社会福祉学科設立 20 周年を祝福した。そして、倉田学科主任の挨拶で閉会した。社会福祉学科の「これまで」と「これから」をテーマとするシンポジウムは、とても有意義で誰もが思い出に残る 1 日であった。（河谷はるみ・穴井あけみ）

安部計彦・中馬充子・倉田康路・
河谷はるみ・倉光晃子・穴井あけみ

【社会福祉学科記念シンポジウム ポスター】

**西南学院大学社会福祉学科
設立20周年記念シンポジウム**

**社会福祉学科の
「これまで」と「これから」**



2021.10/30 13:30~16:00

参加費
無料

開催スケジュール

- 開会式 13:30~13:40
- シンポジウム 13:40~15:20 (休憩を含む)
シンポジスト 新口 馨弘氏 (社会福祉法人 福岡県若者支援センター理事長、元-西南学院大学社会福祉学科教授)
住田 啓二氏 (西南学院大学社会福祉学科17期生、高松社協の職員、社会福祉法人 福岡市社会福祉事業団)
木下 実城氏 (西南学院大学社会福祉学科14年生)
- コーディネーター 安部 計彦 (西南学院大学社会福祉学科教授)
- 卒業生からのメッセージ(動画) 15:20~15:50
- 閉会式 15:50~16:00

西南学院大学チャネルより
YouTube同時配信

お問い合わせ先 西南学院大学 人間科学部社会福祉学科 社会福祉実習指導室
〒814-8511 福岡県早良区西新6-2-92
TEL 092-823-3926 FAX 092-823-3936
E-mail: fuku@seinan.ac.jp/seiwan@seinan.ac.jp
西南学院大学ホームページ <https://www.seinan.ac.jp/>

西南学院大学

【退職した教員を交えての記念撮影】



Ⅱ. 20 周年記念誌の発行

社会福祉学科設立 20 周年を記念して、2022 年 3 月に「社会福祉学科設立 20 周年記念誌」を発行した。この記念誌は、社会福祉学科年表、社会福祉学科教員の変遷を示し、本学学長、人間科学部長、社会福祉学科主任からの祝辞、社会福祉学科を退職した教職員からのメッセージ、社会福祉学科に現在在籍の教職員からのメッセージ、教務課で社会福祉学科を担当された職員からのメッセージ、社会福祉学科卒業生からのメッセージで構成した。社会福祉学科年表は、表 1 に示す。これまでの社会福祉学科関係者に寄稿依頼を行ったところ、計 86 名の関係者よりご寄稿頂いた。

当時本学学長であった G.W. パークレー教授、人間科学部長であった田代裕一教授より祝辞が寄せられ、今後の社会福祉学科の発展に向けて励ましのお言葉を頂いた。また、当時社会福祉学科主任であった倉田康路教授から、本記念誌の作成にあたり関係者から頂いたメッセージへの感謝の意が述べられ、社会福祉学科の目的、理念、ミッションを示し、これからの新たな社会福祉学科の発展に向けた意志が示された。

社会福祉学科を退職された教職員からのメッセージでは、14 名よりご寄稿頂いた。20 年前の社会福祉学科創設時や在任時の社会福祉学科の歩みを懐かしく振り返り、学生の教育に励まれた思い出について述べられていた。また、各々の近況についてご報告いただき、現代社会における社会福祉関連の問題に触れながら、今後の社会福祉学科に期待することをお寄せ頂いた。そして、学生の社会福祉業界への就職に向けた思い、社会福祉専門職養成に関する思い等今後の社会福祉学科の発展を祈念するお声を多く頂いた。

社会福祉学科に現在在籍の教職員からのメッセージでは、19 名の寄稿があった。多くの教職員より、20 周年を祝福し、社会福祉学科創設からこれまでにご尽力くださった関係者への感謝の思いが述べられた。そして、本学社会福祉学科への赴任のきっかけを振り返り、学科の現状に触れて、各々の専門分野の視点からこれからの社会福祉学科の発展に対する意志が述べられた。「変動性」や「多様性」という言葉が増える現代の状況下で学科の存在意義を考えながら、

在學生と卒業生が繋がり、幅広い分野で福祉マインドを持ち社会貢献できる人材育成、学生教育に対する思いが示された。また、実習指導室職員からは、これまでの社会福祉学科の歩みに対する感謝の意が述べられ、社会福祉士等の養成カリキュラム改訂に触れ、これまで培われた歴史と伝統を継承し、新たな時代に応じたソーシャルワーク育成への思いが述べられた。新たな教員が増えていく中で、バトンを繋ぐことでの社会福祉学科の持続可能性が示唆された。

教務課で社会福祉学科を担当された職員からのメッセージでは、4名よりご寄稿頂いた。社会福祉学科20周年の祝福、学科の設立及び運営に尽力された関係者への敬意とともに、開設当時のことや第1期生の学生の熱意や志高い姿勢等これまでの学生の様子を振り返り、社会福祉学科の特徴として教員、学生、卒業生間の立場や世代を超えた繋がりや強さをあげ、今後もそうあって欲しいという願いが述べられた。また、社会福祉学科卒業生の活躍を祈念するお言葉が寄せられた。

社会福祉学科卒業生からのメッセージでは、46名よりご寄稿頂いた。社会福祉学科20周年の祝福、学科に対する感謝の思いとともに、在学時の大学生活、受講した講義や海外実習、サークル活動、ゼミの活動や卒業研究、ボランティア活動等を振り返り、支えとなっているゼミ教員の言葉等が示され、有意義で充実していた西南社福での大学生活であったという声を多く頂いた。また、ご寄稿頂いた卒業生の多くは社会福祉関係の仕事に従事され、各々の近況に触れながら、ソーシャルワークの仕事のやりがいを語り、大学での学びが活かされていること、大学時代にできた繋がりや大切さ、各々の「今」に繋がるスタート地点であったというお声も多く寄せられた。在學生へ向けたメッセージとして、4年間で座学と実践を繋げ、より深い学びを行うことの意義、「学びが一生のものとなるように」「多くのことにチャレンジしてほしい」と励ましのお言葉も頂いた。そして、現代社会における「福祉」の重要性やソーシャルワーカーの仕事の魅力について語られ、「どのような環境でもソーシャルワークは実践可能なのも、常に福祉の実践者であること」「福祉の世界で働く人がひとりでも多く西南社福からうまれるように」と社会福祉学科からソーシャルワークの仲間が輩出されることを願う後輩の活躍の期待や社会福祉学科の発展

を祈念するお言葉を頂いた。

ご寄稿頂いた全ての関係者のメッセージから今後の社会福祉学科の発展に繋がる多くの貴重な示唆を得ることができたことに、心より感謝申し上げたい。これらのことを糧に新たな時代に向けて、社会福祉学科の「これから」をより一層充実させていくことに活かしていきたい。(倉光晃子)

【社会福祉学科設立 20 周年記念誌】



表1 社会福祉学科年表

西南学院大学人間科学部社会福祉学科 年表 (2001.4～2021.12)

*敬称略

年度	月	出来事	学部	部長・主任*	教員*	入学数	編入数	卒業数	
2001	4	文学部に社会福祉学科増設 専任教員5名	文学部 社会福祉学科	教育福祉部長： 松永裕二	測上継雄 (2005.3 まで) 村田豊久 (2005.3 まで) 堺 太郎 (2005.3 まで)	188 (人)			
	7			教育福祉部長： 大濱順彦 学科主任： 堺 太郎	D.A.Johnson (2008.9 まで) 山崎喜代子 (2016.3 まで) 森本利和 (2014.3 まで) 野本益寛 (2019.3 まで)				
2002	4	社会福祉学科に 専任教員9名就任		実習指導室主任： 進藤啓子	井上哲雄 (2012.3 まで) ※ 2012.4 より心理学科へ 井手順子 館 暁夫 (2020.3 まで) 野口幸弘 (2019.3 まで) 賀戸一郎 (2018.8 まで) 進藤啓子 (2012.3 まで) ※ 2012.4 より心理学科へ 中里 操 (2016.3 まで) 平 直子 山本裕子 (2014.3 まで)	152			
	7			教育福祉部長： 藤田尚充 学科主任： 中里 操					
2003	4				教育福祉部長： 藤田尚充 学科主任： 中里 操		179	12	
2004	4				実習指導室主任： 野口幸弘		200	10	190
	3								
2005	4	人間科学部設置 大学院人間科学研究科設置		人間科学部 社会福祉学科	人間科学部長： 松永裕二 学科主任： 井上哲雄 実習指導室主任： 野口幸弘	高谷よね子 (2010.3 まで) 新福尚隆 (2012.3 まで) 安部計彦	179	9	155
	7								
2006	4							177	14
	3								
2007	4	社会福祉士及び介護福祉士法改正			人間科学部長： 山崎喜代子 学科主任： 野口幸弘 実習指導室主任： 賀戸一郎		178	12	207
	7								
2008	4						159	10	182
	3								

年度	月	出来事	学部	部長・主任*	教員*	入学 数	編入 数	卒業 数	
2009	4	社会福祉士養成新カリキュラム開始	人間科学部 社会福祉学科	人間科学部長： 磯 望 学科主任： 山本裕子 実習指導室主任： 安部計彦		177	10	164	
	7	保育士養成課程を開設							
	3								
2010	4	実習指導室が 5号館2階へ移転			大西祥恵（2015.3 まで）	159	10	169	
	3								
2011	4				人間科学部長： 野口幸弘 学科主任： 安部計彦 実習指導室主任： 平 直子	小林隆児（2020.3 まで） 中馬充子（児童教育学科より）	163	8	168
	7								
	3								
2012	4	心理学科開設に伴い定員減（150名→110名）					115	4	165
	3								
2013	4				人間科学部長： 田代裕一 学科主任： 安部計彦 実習指導室主任： 大西祥恵		170	5	183
	3					山田美保 萩沢友一	110	4	158
2014	4								
	3								
2015	4				人間科学部長： 中村奈良江 学科主任： 野口幸弘 実習指導室主任： 山田美保	山本佳代子	143	4	168
	3								
2016	4	西南学院百年館完成			倉田康路	124	5	115	
	5	西南学院創立 100 周年記念式典開催			山根明弘				
	3								
2017	4	新大学図書館完成		人間科学部長： 渡邊 均 学科主任： 萩沢友一 実習指導室主任： 山田美保	山崎先也	112	5	163	
	3								
2018	4				河谷はるみ	109	4	122	
	3								
2019	4			人間科学部長： 深谷 潤 学科主任： 井手順子 実習指導室主任： 山本佳代子	倉光晃子 田原亮二 孔 英珠	110	5	132	
	3	実習指導室が 2号館2階に移転							
2020	4				田中康雄	107	3	127	
2021	4	社会福祉士・精神保健福祉士新カリキュラム開始		人間科学部長： 田代裕一 学科主任： 倉田康路 実習指導室主任： 河谷はるみ	中村秀郷	115	4		
	10	学科設立 20 周年記念 シンポジウム開催							

Ⅲ. 20周年記念植樹式

1. 記念植樹式について

2022年6月29日（水）、社会福祉学科設立20周年を記念する植樹式が催され、葡萄が本学聖書植物園（大学チャペル南側）に植樹された。2001年4月に設立された社会福祉学科は、この20年間で約3,000人も卒業生を社会に輩出し、彼ら彼女らは福祉分野をはじめ、社会の幅広い分野で活躍している。

この植樹式は、昨年10月から始められた一連の学科設立20周年記念事業、シンポジウム、記念誌発行に続く最後の企画であり、約40名の教職員および学生の参列を得て挙行された。

植樹式では、開式に当たり、まず聖書植物園管理・運営委員会委員長を務める本学神学部教授の須藤伊知郎氏からいただいた祝辞として、「房の谷」の名を持つ葡萄ネヘレスコルの樹が豊かに実を稔らせ、当学科に注がれる神の限りない恵みと祝福を象徴するものとなることを祈念する旨、披露された。

次に、当学科・学科主任の倉田康路氏が当学科を代表して挨拶に立ち、学科設立20周年を迎え、これまでに巣立った多くの卒業生が当学科で学んだ知識や技術を幅広く社会に還元してきたが、本植樹式を新たなスタート地点として、次の10年、20年に向けた当学科の新たな発展を期したい、引き続き変わらぬご支援を賜りたいと抱負を述べた。

また、本学神学部・名誉教授の小林洋一氏からは、新たに記念樹に選ばれたブドウ科の品種ネヘレスコルについて、次のとおり紹介をいただいた。葡萄は聖書において、七産物（小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろ、オリーブ、ナツメヤシ）とされる重要な植物の一つであり、旧約聖書（民数記13:23-24）には、2人の男手で漸く担げるネヘレスコルの巨大なブドウの房が登場する。聖地で旧約聖書の時代に既に生育していた品種が、三千年以上の時を超えて、本学の聖書植物園に加えられた意義はたいへん大きい。

最後に代表者が植樹を行った上で、当学科の教育がネヘレスコルの葡萄のようにたわわな実りをもたらすことを参加者全員で祈り、記念植樹式を終えた。

2. 大学聖書植物園に植樹することの意義

記念植樹を快よくお認めいただいた本学聖書植物園について、理解を深めておきたい。本学聖書植物園²は、聖書に登場する植物を、可能な限りキャンパス内に収集・復元しようと、1999年11月、大学開学50周年の記念事業として大学同窓会の寄附金を基に開園された。この植物園の特徴の一つは、聖書の植物がキャンパスの一角地ではなく、キャンパス全体に散在的に植えられていることである。

聖書植物の同定の困難さは、当該植物が協会誌と新共同誌とで異なる植物名で訳されていることから窺える。加えて、聖書の地、パレスチナの気候風土が福岡市と異なるため、管理・運営が予想以上に困難であることも予想される。越冬に失敗する植物、高温多湿に弱い植物もあり、系統維持に困難を極めたに相違ない。しかし、試行錯誤を繰り返しつつも、16年前に9種の植物でスタートした聖書植物園には、現在、約100種の植物が集められ、全キャンパスに点在し聖書の世界を展開している。原産地のパレスチナから遠く離れた日本の地にある聖書植物園として、植物の同定あるいは聖書翻訳の困難さを示す「学び」のための植物園とも言えよう。聖書の地、福岡の大学キャンパスで植栽された植物が収録された、言わば「緑の考古学」としての実験報告書は、2017年5月に『聖書植物園図鑑』として出版されている。価値ある記念事業を成し終えられた「聖句解説」の小林洋一氏と「植物解説」の山崎喜代子氏のお二人に敬意を表したい。

3. なぜ、「ブドウ」を植えるのか

今回の記念植樹に際しては、小林洋一氏と山崎喜代子氏に記念樹の選定と看板の聖句に至るまでの全てをお引き受け頂いた。先の図鑑³によると、聖書では、ブドウの木とイチジクの木の下に住むことは、幸福、平和、豊かさの象徴とされた。また、医学的保障はないものの、ブドウ樹液は皮膚病や眼病、炎症

² 西南学院大学聖書植物園書籍・出版委員会「聖書植物園図鑑」2017年5月、丸善プラネット株式会社

³ 前掲書2「聖書植物園図鑑」

や出血を止めるのに使用し、熟す前のブドウは喉の痛みの治療に、熟したブドウはコレラ、天然痘、吐き気、腎臓病や肝臓病の治療に、レーズンは結核、便秘や喉の渇きの処置に使用されたと言う。

ところで、「1房10kgの記録もある世界最大品種」と紹介された「ブドウ」はどのような希少種・珍種なのであろうか。警見の範囲で確認してみよう。聖書には1房に棒を通して2人の男が担いで運んだ巨大なブドウの話が出てくるが、これが「ネヘレスコール」と言われている。果粒は卵型で中粒(3g程度)、花ぶるい、脱粒はなく、果皮色は黄緑色、糖度は高いものの果肉は締まって堅く、香りがあまりないため一般に観賞用とされている⁴。また、「果粒重3～4g」「本種は最古の品種で最大の果房といわれ、10kg以上になる。」「旧約聖書の中に房に棒を通し、二人の男が担いで運んだブドウの話があるが、おそらく本種のことであろう」という記述が多くを占めている^{5,6}。さらに、九州の大分農業文化公園では「ネヘレスコール・ワイン」(白ワイン)を生産・販売しており、「糖度は20度、種はあるがさっぱりとした懐かしい甘さが特徴です」⁷との紹介もあり、ワイン好きの方にとっては興味深いのではないだろうか。

岡本⁸は近代日本における記念植樹の系譜をまとめる中で、政治的事情により時に左右される一面があるものの、心を込めて「念じて木を植える」という記念植樹という行為が有する、自然物の「いのち」を尊ぶという根本的な姿勢に違いはないと言う。本学科設立の意義を再確認すると共に、新たな希望を持って邁進する機会を得られたことに感謝せざるを得ない。

謝辞 記念植樹の準備に際しては、小林洋一氏(名誉教授・神学部)、山崎喜代子氏(元人間科学部教授)、清水明氏(メイポップ)、そして宮崎太一氏(総務課)と田中純氏(総務課)、加藤寿一氏(キリスト教活動支援課)に多くのご支援をいただいた。ここに深く感謝し御礼の言葉に代えたい。(中馬充子)

⁴ NHK「趣味の園芸」ブドウトリビア 2020年8月号, 39頁

⁵ 植原宣紘『日本のブドウハンドブック ワイン用から生食用まで完全網羅したはじめてのブドウ事典』イカロス出版 2015年7月, 94-96頁 154頁,

⁶ 植原宣紘/編著『ブドウ品種総図鑑』, 創森社 2018年6月, 41頁

⁷ 大分農業文化公園 URL: <https://www.oita-agri-park.or.jp/farm/> (2022年11月7日閲覧)

⁸ 岡本貴久子「記念植樹と日本近代」2016年3月, 思文閣出版



(くるるパーク提供)

ヘブライ語 תּוֹלַת עֵץ
 英語 common grape
 花期 5月

ネヘレスコル / ブドウ

Vitis vinifera subsp. *vinifera* ブドウ科

彼らはエシュコルの谷まで行き、一房のぶどうの付いた枝を切り取り、棒で担いで二人で運んだ。また、ざくろといちじくも取った。この場所は、イスラエルの人々が切り取った一房のぶどうにちなんで、エシュコルの谷と呼ばれた。(民数記 13:23-24、協会共同訳)

出エジプト後、モーセは滞在していたパランの荒れ野から目指す侵入地カナンに偵察隊を送った。偵察隊はカナンの地の肥沃さを象徴するような、大きなブドウの房を持って戻ってきた。ネヘレスコル(Nehelescol) は、ヘブライ語のナハル(nahal=谷)+エシュコル(eshkol=房) から来ている。本種はイスラエル原産のヨーロッパブドウの栽培種のひとつである。日本では、房が長いのが特徴なので、三尺(30.3cm×3)ブドウと名付けられている。

聖書植物園 ㊸



【植樹式の記念撮影】



おわりに

本稿の終わりにあたり本学科が開設された22年前に思いを巡らし、いま改めて西南学院大学に社会福祉学科が存在することの意味を考え、20年を区切りとしてリスタートするこれからの本学科の教育の姿について、本学学則に定められる社会福祉学科の教育理念・目的および今年度新たに定められた3つのポリシー（①卒業認定・学位授与方針、②教育課程編成・実施方針、③入学者受け入れ方針）を通してしてまとめてみたい。

社会福祉学科の教育の理念と目的は「キリスト教主義による人間教育の理念に基づいて教育を行い、社会福祉の分野に関する専門的知識と技能の習得を通じて、これらの分野の専門家である社会福祉士、精神保健福祉士、保育士などを養成するとともに、これらの専門的知識と技能を生かして社会に貢献しうる人間を育成することを目的とする」（西南学院大学学則第1条）である。教育の理念とは、教育を行う側の教育を行ううえでの価値観を意味し、教育の目的とは、理念に基づく教育を行った結果としての到達点を意味しよう。同規定か

ら本学科の教育の理念は「キリスト教主義による人間教育の理念に基づいて教育を行う」ことであり、教育の目的は「社会福祉の分野に関する専門的知識と技能の習得を通じて、これらの分野の専門家である社会福祉士、精神保健福祉士、保育士などを養成するとともに、これらの専門的知識と技能を生かして社会に貢献しうる人間を育成すること」である。キリスト教主義の人間教育に基づく社会福祉の教育とは、どのような教育なのだろうか。

社会福祉の源泉の一つにキリスト教による慈善事業があり、社会福祉とキリスト教に密接な関係があることは本稿の冒頭に述べられているとおりであるが、キリスト教の「愛」と「奉仕」の精神は、社会福祉の理念である「人間の尊厳」と「人と社会を支える」という取り組みに通じ、根源を同じくするものといえよう。すべての人ひとり一人をかけがえのない存在として認め、信じることができる「隣人愛」をもって、その気持ちを、気持ちのなかだけに止めるのではなく、その先にある行動に移し、献身的に人や社会を支えていく取り組みを行うことにキリスト教と社会福祉が結びつけられ、ここに 22 年前に西南学院大学に社会福祉学科が設置された背景と存在する意義が認められよう。

社会福祉学科 20 周年と軌を一にして 2021 年度から大学全体を含む新たな教育課程づくりがすすめられ、本学科においても卒業認定・学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づく教育にむけて、教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に即して新たな教育課程が編成され、入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）および履修モデルが設定された。それは、①アドミッション・ポリシーとして掲げられる、人と環境について学ぶことに関心をもち、多様な人々の価値観を尊重し、社会支援のあり方を探求する意思をもつ者や、将来、社会の貢献する意欲をもち、社会福祉分野に自らの課題を見出そうとする者を受け入れ、②カリキュラム・ポリシーに基づき、キリスト教を始めたとする共通教育科目や社会福祉学を基盤とした専門教育科目から編成される教育課程による学修によって、③ディプロマ・ポリシーとして定められる、人と社会を結びつけ、生活上の問題を理解することができる力、社会の変化に柔軟に対応するための思考力や判断力、主体的に人と協働し、問題を解決する力、人間の尊厳をもって人と向き合い、取り組んでいく価値観を探求する

力を修得させることといえる。さらにこれら3つのポリシーを4つの履修モデルに反映させている（①社会福祉士受験資格取得履修モデル、②社会福祉士・精神保健福祉士受験資格取得履修モデル、③社会福祉士受験資格取得・保育士資格履修モデル、④共生社会履修モデル）。

これからの時代に応じた新たな教育、ニーズが拡大する新たな社会福祉の視点と枠組みのなかで、変えなければならないものと変えてはいけないものを認識し、開設当初から変わらない社会福祉学科の教育の理念と目的を基盤として、新たに掲げられた3つのポリシーに基づく教育に取り組んでいくことがわれわれ社会福祉学科教員のミッションといえよう。

本記念事業の開催にあたっては社会福祉実習指導室の池田千夏氏や堀千鶴氏はじめ多くの皆様方よりご支援いただきました。心より感謝申し上げます。

（倉田康路）

※写真やチラシについては、許可を得て転載。

西南学院大学人間科学部社会福祉学科